

バクーニンとマルクス

——ネチャーエフとの関係をめぐって——

左 近 毅

1

第一インターナショナルをめぐるバクーニンとマルクスとの歴史的対立は、これまでに様々な形で論じられてきた。しかし、それらの論争によってもなお問題の全てが勿論説明され尽した訳ではなく、バクーニンの第一インターナショナルからの除名一つを取りあげても、とりわけその除名理由については未だ十全な検討がなされたとは言い難い。

マルクスおよび総評議会は、この除名の実現ならびに正当化のために周到な調査と資料収集を行い、1872年9月のハーグ大会席上に於て、バクーニンの除名を可決成立させた。マルクス派による除名理由正当化の手続き過程はいかなるものであったのか？ この点をロシア革命運動史の側からの史料を手がかりに、除名への経過をいわゆる「リュバービン事件」を中心に新たな観点から掘り起し、除名根拠づけの妥当性に関し一つの解釈を施すことによって、「バクーニン対マルクス」の論争点に問題提起を行うのが、本論の狙いである。⁽¹⁾

2

第一インターナショナルからのバクーニン除名決議にあたって、マルクスが掲げた除名理由には、バクーニンの分派行動ないしは組織破壊活動なるものと並んで、「ある個人的事件」⁽²⁾がある。分派行動とは、第一インターナショナルに属し乍ら、その内部に敵対的な秘密組織即ち国際社会民主同盟（アリアンス）を創設したとの点を指す。既に別稿に於て論述した⁽³⁾ように、この点に関しても、マルクス側にはバクーニン排除の要請に裏打ちされて、国際社会民主同盟の組織規模と力量をめぐって実態を越えた評価が窺われ、またとくにイタリアとスペインの革命運動と組織に及ぼしたバクーニンの影響も必要以上に彼らは過大に認識していたことを指摘しておこう。さて、除名理由の一端を構成する「ある個人的事件」とは、いったいいかなるものであったのか？ 組織原則違反の理由は兎も角、私的事柄が不自然に除名の契機として介在するに至っ

たのは、なぜであろうか？ 事態がまさしく、マルクスに個人的に関わっていたからである。

1867年に完成したマルクスの『資本論』第1巻は、年余にしてロシアへも持込まれ、ペテルブルクでサークルを作っていたロパーチン、ダニエリソン、ネグレスクル（ラヴロフの娘と結婚）、リュバービンらのグループによっていち早く読まれた。⁽⁴⁾ 彼らは即座に『資本論』の翻訳を構想し、進歩的なペテルブルクの出版社であるポリャコフ社の了解も取付け、1868年9月にダニエリソンがマルクスから直接の許可を得て、翻訳の準備作業は着々と進められた。翌年春、たまたまスイスのロシア人亡命者グループと連絡を取りにジュネーヴを訪れていたネグレスクルは、スイス人の活動家シャルル・ペロンからバクーニンの経済的窮状を訴えられ、収入の道を供与するよう依頼された。彼は早速ドイツ留学中のリュバービンと連絡を取り、バクーニンの方も承諾して談合は成立、かくして運命の皮肉で最初の『資本論』の外国語訳は、バクーニンの筆先に託されたのであった。但し両当事者たるバクーニンとマルクスが、この問題について直接連絡を取合ったかどうか不明であるし、またダニエリソンらがマルクスに相談した様子も窺われない。⁽⁵⁾

ポリャコフ社の支払う翻訳料は1200ルーブルと決まり、その内前渡金は300ルーブル、訳稿は出来次第順次送付することになった。⁽⁶⁾ だがバクーニンの翻訳作業は遅々として進まず、11月に至っても手付かずの状態にリュバービンは督促し、ダニエリソンは契約破棄をリュバービンに勧告した。⁽⁷⁾ 12月初旬に漸く着手したものの、1日3、4頁で、気も乗らなかったに相違ない。「マルクスの形而上学を翻訳している」⁽⁸⁾ 旨（傍点筆者）、皮肉たっぷりにゲルツェンへ書き送っているのである。併せて、内容の難解さも遅延の一因であろう。例えばバクーニンはWertの訳語に苦しんだ⁽⁹⁾と述べているし、難訳語の一覧表も作成したらしい。12月19日に第1回の訳稿を送り、31日に第2回を送り出した。作業はここで途絶している。結局訳了したのは、原文で32頁、つまり序文を入れたとして、おそらく第1章の一般的価値形態の項までであった。なお、送付した訳稿がその後どうなったかは不明である。

バクーニンの翻訳作業が破綻をきたした後は、ロパーチンがこれを承引して作業を継続し、さらに1870年11月同人がチェルヌイシェフスキー救出の目的でロシアに帰国して逮捕されたため、残余はリュバービン、ダニエリソンが引継いだ。⁽¹⁰⁾ こうして『資本論』第1巻のロシア語版は1872年4月に完成し、3000部印刷され、訳者名なしで刊行された。⁽¹¹⁾ 1ヵ月半で2分の1が売れたと伝え

られるが、これは当時の出版界からすれば異例の売行きであった。¹⁴²

3

バクーニンによる『資本論』訳業の中絶は、ネチャーエフの出現によって完全となった。例のイヴァノフ殺害事件の後、再度ロシアを脱出してスイスへ潜入してきたネチャーエフは、翻訳に追われかつ前渡金の受領によって身動きのとれぬ状況にあったバクーニンに、詰まらぬ翻訳が大切か革命の事業が大切かと迫り、エネルギーの徒費をやめて革命活動に専念するよう強く訴えた。¹⁴³そして、生活費を別途に保障するとの約束と引換えに、ついにバクーニンをして契約の履行を破棄させ、事後処理の一切を請合ったのであった。¹⁴⁴

かくして彼はバクーニンを翻訳の義務から解放するとの目的で、ハイデルベルク在住のリュバービンに宛て1870年2月13日(25日)付の手紙を送った。¹⁴⁵ロシア革命結社「人民の裁き」在外ビュローのスタンプで送付されたこの手紙は、リュバービンがバクーニンを抱き込んでマルクスの著書の翻訳で身を縛り、人民の革命活動に投ずる可能性を奪っているのはまことに忌むべき行為であり、「ブルジョア的かつ背德的であり、警察のやり口といささかも異なる」¹⁴⁶と断じて、その翻訳がロシアにとって有益と考えるなら自身でそれを行い、直ちにバクーニンを翻訳の道徳的義務から解放すべしと要求したものであった。わけでも、後日大きな禍根をもたらしたのは、「われわれが再度穏便ならざる手段に訴えなくてもすむように取計らって貰いたい。われわれの要求の実施を遅らせず、われわれが非常手段、手荒な手段に訴えずにすむようにして貰いたい」¹⁴⁷と述べた脅し文句である。

この所謂脅迫状の末尾には、加えて「本状と封筒を同封の上、バクーニンに送ること」¹⁴⁸との要求が示されていた。所が幸か不幸かこの脅迫状は、バクーニンへ転送されずに終わった。転送されていたなら、事態は全く別の方向へ進展していたかも知れない。リュバービンがバクーニンに送ったのは、激しい抗議の手紙だけであった。¹⁴⁹これを受取ったバクーニンは論駁の返書をしたため、300ルーブルの領収書を書き、リュバービンの無礼に我慢しかねるが故に翻訳は中止すると述べて、ネチャーエフの要求に応じて投函を委ねた。¹⁵⁰ 同人がこれを握り潰したおかげで、事態は一層悪化に向かったことは当然である。

「人民の裁き」からリュバービンへ宛てたこの手紙は、その筆蹟からネチャーエフが草したことは判明しているものの、果して彼の単独判断によって書かれたものか、或いはバクーニンが内容を承知していたのか、そしてその文面を

全面的に容認していたのかを巡って、後世に論議の種子を残した。但し、この「リュバービン事件」をバクーニン除名の一理由に掲げた際、この脅迫状がバクーニンの依頼によってネチャーエフが代筆したとする判断と認識が、マルクス側の行動の前提になっていたことは言うまでもない。果して、真相はどうであったのか？

フランスの研究者カナックは、バクーニンがネチャーエフ自身の口から事件の真相を知ったとしている²⁰¹が、その可能性は少ない。和田論文も、「ネチャーエフがバクーニンに代って書いた」²⁰²と指摘するが、この問題について同氏はとくに詳しい分析をされているわけではない。またオランダのバクーニン・アルヒーフ第4巻²⁰³はこの問題に触れず、等閑に付している。バクーニンがこの手紙について知っていたかどうかの証拠はないとして、解明不可能としたのはソヴィエトのステュクロフで、E・H・カーもコジミンもこれを踏襲している。²⁰⁴

一方これらに対し、バクーニンが関知しなかったとする主張は比較的多く見受けられる。イスラエルのコンフィーノを初めとし、²⁰⁵ソヴィエトの女流史家ピルーモヴァも、新旧いずれの『バクーニン伝』に於いても、バクーニンは手紙について知らなかったと推論し、²⁰⁶フランスのジャン・バルエもこれらと見解を同じにしている。²⁰⁷そして昨年物故したフランス共産党の長老デュクロも、バクーニンの知らぬうちにネチャーエフが草したと主張、²⁰⁸リバーユも近著で同じ判断を下している。²⁰⁹

こうして、バクーニンとネチャーエフの同一視から出発し、リュバービン宛の脅迫状は前者の命令で書かれたとの前提に基いて遂行された、バクーニン除名へ向けての一連のマルクス側による活動は、凡そ100年後の今日に至って、その前提を疑問視する多くの主張の前に立たされている。とは言え、ここに掲出したバクーニン不関知論の殆んどは論証を欠き、後日のバクーニン=ネチャーエフ決裂の状況証拠にのっとって推論しているらしいとの印象を受ける。唯一の例外はコンフィーノである。彼は「あらゆる証拠からして、ネチャーエフがリュバービン並びに出版社とどのように問題を処理したのか、バクーニンはあずかり知らなかったし……それを知ったのは漸く5月で、十中八九ロパーチンの話によってであると思われる」²¹⁰と述べ、断定こそ避けているものの、かなり確信的な主張を行なっている。ロパーチンのジュネーヴ来訪は事件の糺明と、ネチャーエフの行動を封ずるのが狙い²¹¹で、5月中旬バクーニン、ネチャーエフそれにロパーチンの三者会談が持たれ、ロパーチンの激しい弾劾をこめた舌端によって真相が明らかにされた。²¹²コンフィーノは論拠を特定して掲

示していないが、バクーニンが脅迫状の執筆並びに発信に関与していなかった「事実」は、何よりも先ず、1966年に発見された彼のネチャーエフへ宛てた1870年6月2日付書面から判然とする。⁸³ その手紙の中でバクーニンはネチャーエフに一連の背信行為に対する釈明を求め、決裂を避ける諸条件の一つとして、「リュバービンの一件に於ける私の立場を弁護し、潔白を証明すること。私が委員会の手紙なるものについて何も知らず、私の関知しない所で、私の意志とは無関係にしたためられた点を説明すること。私のリュバービンへの返事と同封した300ルーブルの領収書を貴君が読み、その発送を引受けて投函或いは投函しなかったことをはっきりさせる」⁸⁴ よう、厳しく要求しているのである。さらに、オガリョフら4名に宛てた同年6月10日の文面でも、ネチャーエフの言う「幻の委員会」に関連し、「ネチャーエフがリュバービンに出した愚劣な手紙……」⁸⁵ と指摘して、彼の行為を難詰したのであった。

一方の当事者の一人であるロパーチンも、脅迫状へのバクーニンの関与については慎重に速断を避け、全ては事実の糺明を待ってからと考えていた。三者会談の後、ロパーチンはバクーニンへ書き送り、自分が早合点しなくてよかった旨を述懐しているのである。⁸⁶

このように、新史料に即して経過を分析してみる時、所謂「リュバービン事件」に於て、バクーニンが脅迫状の執筆と発信に聊かも携わっていなかったことが判る。既に『革命家のカテキズム』に関する拙稿⁸⁷ で明らかにしたように、バクーニンは革命の理解の仕方や戦術、組織論をめぐって若いネチャーエフとは多くの点で異質の要素を擁し、加えて両者の人間性には大きな懸隔と距離が存したにも拘わらず、前者は後者の革命家としての資質に専ら注目して、異例の共同活動の時期を有した⁸⁸ のであって、その異質性はマルクスとの不幸な論争の過程で稀薄化し、消去された。マルクス側にあっては、寧ろ二人の同質性がネチャーエフの陰謀的行動に屈折して大きく拡大されて映り、「事件」の一切の責任を最大の政敵バクーニンに帰することにちゅうちょしなかったのである。

然し乍ら最後に附言すれば、バクーニンは脅迫状の一件を知らなかったとはいえ、コジミンとペレセレンコフが指摘するように、⁸⁹ 道義上の責任と軽率の謗りを免れることはできまい。事実バクーニンはネチャーエフにリュバービンの住所を教えているわけで、そもそも翻訳の事後処理を第三者の手に委ねた所に「事件」の発端があった。

4

以上の事実にも拘わらず、バクーニンとマルクスの対立の間隙に落ち込んだ「リュバービン事件」は、それ自体で大きく展開してゆく。ナロードニキ運動の中でも最も興味深い人物の一人⁴⁰で、ペテルブルクの「ルーブルの会」のリーダーであり、「リュバービン事件」の全貌を知ったロパーチンは、『資本論』翻訳の作業を自ら続行する決意を固め、パリからロンドンのマルクスの許へ飛んで親しく会見した。マルクスとエンゲルスのロパーチン評価は高く、⁴¹ 满腔の熱意を以て翻訳に力を貸した。勿論だが、この際ロパーチンが「リュバービン事件」に関してマルクスに話をしたことは間違いなく、⁴² 寧ろ当初のマルクスには「欺され易いお人好しのバクーニン」⁴³ に同情している様子さえ見受けられた。これには、多分にロパーチンの人柄が影響している。彼はネチャーエフこそ強く批判したものの、事件に関して自己の所有する文書をマルクスに渡すことはせず、ロシアや西欧の革命運動にそれなりの役割を果たした人物を、世界の面前で中傷するのに手を貸す方向を採らなかったのである。他方、バクーニンに不利な事実の収集に狂奔する同国人がスイスに存在した。『人民の事業』誌をめぐって前者と対立したニコライ・ウーチンなる人物で、マルクスの重要な情報提供者となり、1870年5月から集めた反バクーニンの材料はその第一インターナショナルからの除名に当たって強力な武器となった。詳細は別稿⁴⁴ に譲るが、バクーニン除名に関し、マルクスの意志決定に彼の激しいバクーニン批判が濃厚に投影している点を指摘しておこう。折からロパーチンが、そして別個の形でネチャーエフがロンドンに滞在していた時、ウーチンはマルクスに書簡を送って「バクーニン告発を短くまとめ、それをあなたに送らせて下さい」⁴⁵ と書き、併せてネチャーエフのロンドン潜入を報告して、その破壊活動に警戒されたしと忠告したのであった。

エンゲルスはマルクスと異なって、当初からネチャーエフのネガティブな面とそのバクーニン関係について、後者を批判するための利用可能性を念頭に置いていた節がある。彼はロパーチンから聞いた話に関連して「ロパーチンの話は知っておくと特に役に立つ。ネチャーエフが何のことはない、只のならず者ということになるとは、願ってもない話だ」⁴⁶ と、マルクスに銘記しておく必要を強調している。マルクスはネチャーエフを殆んど問題にせず、『フォルクスシュタート』がネチャーエフ関係資料を掲載した際も、本気になって相手にしないよう警告した程であった⁴⁷ が、例の「ネチャーエフ事件」の全貌が漸次報道され、ネチャーエフがバクーニンより得た「ヨーロッパ革命同盟」代表の

呼称が、国際労働者協会とあたかも関係している旨の噂が喧伝されるに及んで、断固たる処置を取る必要を認識し、協会特別委で「ネチャーエフは第一インターナショナルとは如何なるつながりも有せず」との声明を行い、文書で公表した。協会の組織へ累が及ぶ危険を改めて認識したマルクスは、背後に潜むバクーニンの役割を念頭に、「リュバービン事件」についても情報の収集に積極的に乗り出した。

自ら情報提供者の役を買ってでた ウーチンは勿論として、ロパーチンを除く⁴⁸ダニエリソンやリュバービンといった当事者にも、マルクスは情報の供与を依頼したのだった。1872年秋のハーグ大会にバクーニン除名の照準を定めて以来、ウーチンの収集作業の遅滞と相俟って、その要請は急となってゆくことが判る。1872年5月28日、ダニエリソン宛の手紙で、「バクーニンがえらく悪さをしていますので、この男について、(1)ロシアに於ける彼の影響力、(2)ネチャーエフ裁判で彼自身が演じた役割を逐一精確にお知らせ願いたい」⁴⁹と書いて協力を求めたマルクスは、バクーニンの影響力は取るに足らず、裁判でもその果たした役割は余り明らかになっていない⁵⁰との返事に接し、再びダニエリソンに書き送って「バクーニンはネチャーエフ事件のマネージャーだった男です。所でこのバクーニンはかつて拙著のロシア語訳の件を任され、それに要する費用を前金で受取っていたのに、仕事も提供せず、出版社の代理で彼とこの件で交渉していたリュバービン（とします）宛に、実に恥ずべき面汚しの手紙を送るか送らせるかしました。もしこの手紙が早速私の元へ送達されるならば（傍点マルクス）、それは私にとって大変役に立つことになるでしょう。これは単なるビジネス（傍点マルクス）ですし、それに手紙が利用されるに当って誰の名前も出るわけではありませんから、あなたが入手されるよう期待します。然しゆっくりしている余裕はありません。送るなら、すぐにしていただかなくてはなりません」⁵¹と述べ、切札の入手希望を単刀直入に明かしている。それに止まらず、マルクスはかつてロンドンで接した保守的なロシアの哲学者バラノフなる人物にも、「リュバービン事件」に関して照会状を送り、例の脅迫状について、バクーニンの同意がなければネチャーエフがそんなことをする筈がない、と言質と保証を得ているのである。⁵²

マルクスの要請は、ダニエリソンから直ちにリュバービンへ伝えられ、後者は直接マルクスへ次のように書き送った。「予め申上げておかねばなりません、私の所有している証拠物件は貴下の考える程確実な代物ではありません。確かにこれはあの人物（バクーニンのこと—筆者）に暗い影を投げるものです

が、さりとて彼を弾劾するには不十分です……」⁶³とし乍らも、「貴下のご要望に沿って、『委員会』の手紙を本状に添付します。但し条件があります。然るべくご利用なさった後、できるだけ早くご返却下さい。こちらでも、必要になるかもしれませんので」⁶⁴として、証拠物件の貸与に同意したのであった。その際リュバービンは、次のように書いて、脅迫状をバクーニンが作成したのではないにしても、それに関与したことは間違いないとの判断を披瀝している。「この書状はバクーニンによって草されたものではないが〔恐らく、直接にはネチャーエフが作成したものでしょう〕、それに対してバクーニンに責任があると思います。当時彼がそれに関わっていたことは、疑いの余地がありません」⁶⁵。

リュバービンは、実際自分の行動や判断に多少のためらいを抱いていた模様で、その点は引用した文面にも漂っている。本来化学を専攻する学生で後年モスクワ大学の教授となったリュバービンには、「事件」の異常な大発展の中に巻き込まれたくない気持もあったに相違ない。同じ手紙の最後には「当時この書状へのバクーニンの関与は、私には疑えないものと思われました。然し打明けて申せば、顛末を今冷静に振り返ってみるに、バクーニンの一件への関与は全く立証できません。事実、ネチャーエフはこの書状をバクーニンの全くタッチしない形で送ることができたわけですし……」⁶⁶と、恰も前言を後悔するかの筆致を示し、マルクスに協力することの後めたさを覗かせているのである。

「脅迫状」はマルクスの手元へ届いたが、彼はその旨の連絡をダニエリソンらに怠り、懸念した後者の問合せで、漸くその無事到着と「効果を発揮した」⁶⁷ことが判明した。但しリュバービンの懇望にも拘わらず、貸与物はついに所有者の元へ返却されずに終わった。⁶⁸切札としての「真筆」の重要性に鑑みて、それを手元に保管しておくことが必要とのマルクスの立場は斟酌しうるにしても、リュバービンに一言の釈明もせず、信義を破った事実はこのようにして後世に残った。返却されなかった「委員会」の手紙は、その後マルクス・エンゲルスの第一インターナショナル関係文書に加えられ、ドイツ社会民主党の歴史文庫から更にリャザノフの手に渡り、モスクワへ移管されるに至った。なお、ローチンがナターリヤ・ゲルツェンに送ったその写しは、ゲルツェン文庫に入ってやはり現存し、パリの国立図書館に眠っている。

一方、矢の催促を受けていたウーチンは、ハーグ大会直前になって漸く龐大な報告書を完成し、100頁近くを費やして、バクーニンとネチャーエフの深い関係の立証に努めた。「委員会」の手紙はウーチン報告の補足文書の一つに加

えられ、社会民主同盟（アリアンス）調査委の席上マルクス自身によって読み上げられ、更にその手でドイツ語及びフランス語に訳されたのであった。因みに、調査委の特別報告でクノーは次のようにバクレーニンの罪状を述べた。「バクレーニン氏は非良心的な方法に訴えて、他人所有の財産を全部ないしは部分的に自分のものにしようとした。これは詐欺行為である。然も自らの引受けた義務を放棄するために、彼もしくはその手先が恐喝に及んだのである。以上に基き、委員会はバクレーニン氏の除名を大会に提案する」⁶⁹

5

バクレーニン排除という目的に出発したマルクスへの情報提供に際して、ロシア人の提供グループは主としてダニエリソン、リュバービン、ロパーチンらと、ウーチンのグループに分かれるが、その協力の質的差異は看過してはならない。⁶⁰ その協力になにがしかの自己規制を行った前者のグループが、却ってその後もマルクス、エンゲルスと接触を続け、結局25年間に及ぶ交流を持ったことは皮肉である。

以上のように、マルクス派が第一インターナショナルからのバクレーニン除名の根拠とした、所謂「リュバービン事件」の核心に存する「委員会」名の書状は、バクレーニンの関知せぬ形で、ネチャーエフ単独の判断に於いて草され、投函されたと結論できる。理論闘争の場面でマルクスに一步譲る所の多かったバクレーニンだが、この問題に関しては不幸な誤解を受け、またマルクスは「個人的」に自らに関わるという問題側面も加わり、同事件に於いて必らずしも公正ではない行動をとった。⁶¹ 歴史はそれに対し、第一インターナショナルの崩壊という形で報復したのであった。

但し同事件が一つの契機となって、マルクス、エンゲルスと内外のロシア人革命グループとの接触が深まり、結果的に前者のロシア認識が拡大し、逆の関係ではロパーチンやダニエリソンらによる、世界に先がけた『資本論』のロシア語への翻訳に道が開かれ、マルクス主義のロシアへの紹介に寄与することとなった点は忘れてはならない。（バクレーニン没後100年記念に寄せて。7月記）

注(1) 本論文は、1975年度日本ロシア文学会総会・研究発表会に於ける口頭報告の成文化を行ったものである。

(2) MEW, Band 18, Berlin, 1962, S. 155. 大月版邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第18巻, 152頁。

- (3) 拙稿『バクーニンの政治綱領』（『一橋論叢』第76巻，第3号所収）参照。
- (4) E・デニロベルティ，Г・エリセーエフ，Ю・ジュコフスキーらの研究者たちも，別個にこれを読んでいた。
- (5) ゲルツェンやマルクスの言からすると，バクーニンはマルクスと直接連絡を取ったとも想像されるが，証拠は残っていない。См.，«Литературное наследство»，том 64，М.，1958，стр. 740. Также см.，Гаагский конгресс Первого Интернационала，М.，1970，стр. 301.
- (6) M. Confino, *Violence dans la violence*, Paris, 1973, p. 79. コンフィーノは翻訳料 900 ルーブル説も挙げているが，前渡金を除いた額と考える方が妥当である。
- (7) Переписка К. Маркса и Ф. Энгельса с русскими политическими деятелями，Л.，1951，стр. 60.
- (8) Письма М. А. Бакунина к А. И. Герцену и Н. П. Огареву， под ред. М. П. Драгоманова，С.—П.，1906，стр. 358.
- (9) Переписка К. Маркса……，стр. 61.
- (10) А. Л. Реуэль，Русская экономическая мысль 60—70-х годов XIX века и марксизм，М.，1956，стр. 226—228.
- (11) З. Х. Саралиева，“Капитал” К. Маркса и рабочее движение России，М.，1975，стр. 4.
- (12) А. Л. Реуэль，указ. соч.，стр. 237.
- (13) Archives Bakounine, IV. Leiden, 1971, p. LVI.
- (14) «Минувшие годы», 1908, окт., стр. 159.
- (15) テキストは次の通り。「Литературное наследство», том 41—42, М., 1941, стр. 155—156., Гаагский конгресс……, стр. 318—321 (写真版を含む), Н. М. Пирумова, Михаил Бакунин, М., 1966, стр. 125—126, Archives Bakounine, II, Leiden, 1965, pp. 472—473, Marx-Bakounine: Socialisme autoritaire ou libertaire? tome 1, textes rassemblés par G. Ribeill, Paris, 1975, pp. 146—148. (フランス語訳)。
- (16) Гаагский конгресс……, стр. 320.
- (17) Там же, стр. 321.
- (18) Там же, стр. 321.
- (19) Рюбербинの抗議文は現存していないが，バクーニンの手紙から抗議の事実が判る。
- (20) 外川継男，左近毅編『バクーニン著作集』5，白水社，東京，1974年，382頁。
- (21) René Cannac, *Aux sources de la Révolution Russe, Netchaiev, du nihilisme au terrorisme*, Paris, 1961, p. 93.
- (22) 和田春樹著『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』，勁草書房，東京，1975年，31—32頁，及び『思想』第582号，1972年12月号，139頁。
- (23) 編者のА・レーニンは，序文で「Рюбербин事件」を論じている。第一インターナショナルに於いてバクーニン弁護の立場に立ったギョームも，この問題に断

- 定を下していないが、ダニエリソンへの問合せに基いて、バクーニンは知っていたのではないかと考えたらしい。 Cf. J. Guillaume, *L' Internationale, Documents et Souvenirs (1864—1878) tome III*, Paris, 1909 p. 13.
- (24) Ю. Стеклов, М. А. Бакунин, его жизнь и деятельность, том III, М.—Л., 1927, стр. 496. E. H. Carr, *Michael Bakunin*, Vintage ed., New York, 1961, p. 402. 大沢正道訳, 邦訳版, 下巻, 現代思潮社, 東京, 1965年, 524頁。《Литературное наследство》, том 41—42, стр. 151.
- (25) M. Confino op. cit., pp. 79—80.
- (26) Н. М. Пирумова, указ. соч., стр. 125, ее же, Бакунин, М., 1970, стр. 311. 佐野努訳邦訳版, 下巻, 三一書房, 東京, 1973年, 117頁。
- (27) Jean Barraué, *Bakounine et Netchaiev*, Paris, 1971, p. 36.
- (28) Jacques Duclos, *Bakounine et Marx, Ombre et Lumière*, Eure, 1974, p. 211.
- (29) *Marx-Bakounine: Socialisme……*, p. 148. なおメーリンクも, ネチャーエフの処理の仕方なるものを, リュバーピンの抗議文で初めてバクーニンは知ったとする。 Franz Mehring, *Karl Marx, Geschichte seines Lebens*, Berlin, 1960, S. 473.
- (30) M. Confino, op. cit., p. 80.
- (31) Ibid., p. 80.
- (32) В. Антонов, *Русский друг Маркса*, М., 1962, стр. 29.
- (33) Письмо к С. Нечаеву, 2 июня 1870. Драгомановやセレ布伦ニコフによって実在を指摘されていたこの手紙は, バリの国立図書館のゲルツェン・アルヒーフに存在することが確認された。
- (34) 前掲『バクーニン著作集』5, 386頁。
- (35) M. Confino, ed., *Daughter of a Revolutionary*, London, 1974, p. 286. フランス語訳は, アルヒーフ第4巻に所収。
- (36) 1870年5月26日付の手紙。 *Archives Bakounine*, IV, p. 350. M. Confino, *Violence……*, p. 172.
- (37) 『バクーニンとネチャーエフ』—『革命家の教理問答書』をめぐって—(『ロシア語ロシア文学研究』第6号, 1974年所収)。
- (38) ネチャーエフが一斉に非難された時, バクーニンはその資質を認めるが故に, 最後まで弁護の立場に止まったのであった。
- (39) 《Литературное наследство》, том 41—42, стр. 151.
- (40) F. Venturi, *Roots of Revolution*, N. Y. 1966, p. 356.
- (41) MEW, Band 33, S. 28 und 96. 前掲邦訳版『マルクス・エンゲルス全集』第33巻, 26頁及び84頁。
- (42) マルクスのエンゲルス宛の手紙(1870年7月5日付)を参照。 MEW, Band 32, S. 519—522. 前掲邦訳版『マルクス・エンゲルス全集』第32巻, 423—426頁。
- (43) a. a. O., S. 521. 前掲書425頁。
- (44) 拙稿『バクーニンとネチャーエフ』(『金子幸彦教授記念論文集』, 恒文社, 東京, 1976年秋刊行予定に所収)。

- (45) Переписка К. Маркса……, стр. 43.
- (46) 1870年7月6日付のマルクスへの手紙を参照。MEW, Band 32, S. 524. 前掲邦訳版『マルクス・エンゲルス全集』第32巻, 428頁。
- (47) ナターリエ・リープクネヒトへの手紙(1871年1月13日付)を参照。MEW, Band 33, S. 169. 前掲邦訳版『マルクス・エンゲルス全集』第33巻, 145頁。
- (48) その後(1870年11月末)ロパーチンは、チェルヌイシェフスキーを救出する目的で再度ロシアへ潜入し、逮捕された。
- (49) Гагский конгресс Первого Интернационала, отчеты и письма, М., 1972, стр. 276. Переписка К. Маркса……, стр. 80. MEW, Band 33, S. 478. 前掲邦訳版『マルクス・エンゲルス全集』第33巻, 387頁。
- (50) Там же, стр. 276, Переписка К. Маркса……, стр. 81.
- (51) Там же, стр. 375, Переписка К. Маркса……, стр. 84—85. MEW, Band 33, S. 516. 前掲邦訳版『マルクス・エンゲルス全集』第33巻, 416頁。
- (52) Там же, стр. 290. Переписка К. Маркса……, стр. 58.
- (53) Там же, стр. 385. Переписка К. Маркса……, стр. 60. 尚この手紙は、次にも収められている。《Литературное наследство》, том 41—42, стр. 157—159. Archives Bakounine, II, pp. 355—357 (ドイツ語)。F. Brupbacher, Marx und Bakunin, München, 1922, S. 191—195.
- (54) Там же, стр. 385. Переписка К. Маркса……, стр. 60.
- (55) Там же, стр. 386. Переписка К. Маркса……, стр. 61.
- (56) Там же, стр. 387. Переписка К. Маркса……, стр. 62.
- (57) 1872年11月25日付ダニエリソンへの手紙を参照。Переписка К. Маркса……, стр. 85. MEW, Band 33, S. 543. 前掲邦訳版『マルクス・エンゲルス全集』第33巻, 438頁。
- (58) Archives Bakounine, II, p. 473.
- (59) Гагский конгресс……, стр. 426.
- (60) Конфиёноは、寧ろロパーチンと片やダニエリソン, リュバービンの間に行動の差異を見ている。
- (61) 《Литературное наследство》, том 41—42, стр. 151. Archives Bakounine, IV, p. LVII. E. H. Carr, op. cit., pp. 401—402. 前掲邦訳書, 524頁。